

「有無を言わせぬ愛」(ガラテヤ 6:11~18)

2019. 6. 2 川越キリスト教会・丸山 勉

[聖書]ガラテヤの信徒への手紙 6章 11~18節

このとおり、わたしは今こんなに大きな字で、自分の手であなたがたに書いています。肉において人からよく思われたがっている者たちが、ただキリストの十字架のゆえに迫害されたくないばかりに、あなたがたに無理やり割礼を受けさせようとしています。割礼を受けている者自身、実は律法を守っていませんが、あなたがたの肉について誇りたいために、あなたがたにも割礼を望んでいます。しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです。このような原理に従って生きていく人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように。

これからは、だれもわたしを煩わさないでほしい。わたしは、イエスの焼き印を身に受けているのです。

兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように、アーメン。

序. こんなにも大きな文字で

今日はパウロが書いた「ガラテヤの信徒への手紙」の最後の部分を読みます。ここにおいてパウロは、自らの筆で「大きな文字で」書くのだ、と言います。このような言い方をするのはここだけ。パウロの熱、真剣さが伝わってくる。私はこんなにハッキリと大きな文字で書いている。どうしてもあなた方に心に留めて欲しいか、心に刻んで欲しいと。

この手紙を閉じるに当たって何としてでも伝えたいこと、それは、**イエス・キリストの「十字架」**ということ。あなた方は信仰者として何を誇っているのか？ 神様の前に、人間的な誇りというようなものは実はちっぽけなもの。そういう人間同士の比較ではなく、あなたが本当のあなたとして生かされ、支えられるのは実は「十字架」なのだ！ とパウロはここで言っている。14節でパウロはこのように記している。

「しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。」

1. 「十字架」こそ中心

一般にキリスト教信仰にとって何が一番大事なことでしょうか？ と尋ねられたら、多くの方は何と答えるか。恐らく一番多い答えは「隣人愛」であろう。信仰というものをとても道徳的に捉えやすい。「十字架です」という答えがどれだけ帰ってくるか？ いや、そもそも私たちはどう捉えているだろうか…。道徳的な次元からは「十字架」という言葉は出てこないと思う。「十字架」というのは、「つまづき」であり、また「愚か」な出来事に相違ない。しかし、パウロは「コリントの信徒への手紙一」の初めの方でこう言っている。

「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。」(1:18) さらにこう記しています。「ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探します

が、わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。」(1:22~24)

これほどまでにパウロをして言わしめている「十字架」。その奥義を私たちはもっともっと知っていきたい。「十字架」が語られない教会は実は教会ではないと言っても過言ではない。

パウロは「十字架」の伝道師だという言われ方もする。彼の手紙には「十字架」という言葉が溢れています。只今読んだコリント書も、また、招きの聖句で読んで頂いたローマ書も「十字架」という言葉は数多くある。彼にとって「十字架」とは、あのゴルゴタの丘の歴史的な出来事であると共に、自分の存在を根底から支える、そういう信仰的、実存的、神学的なもの。

2. 「十字架」とは、「裁き」であり、「和解」である

生まれつきのユダヤ人にとって、誇りにしていたものは「律法」であり、「割礼」であった。それは、神様の憐れみを受けて、その契約関係に生きていく「掟」であり「しるし」だった。しかし、それがいつしか他民族と私たちは違うのだという誇り＝高ぶりになっていた。神様はイスラエル＝ユダヤの民を、何か立派だからではなく、まことに弱小の民だからこそ選ばれた。そのことを忘れ、律法や割礼を遵守することだけが一人歩きをしていた。パウロはそれを見抜いて言う。「割礼を受けている者自身、実は律法を守っていませんが、あなたがたの肉について誇りたいために、あなたがたにも割礼を望んでいます。」(6:13) と。

そんなことを言っているあなた方は、何も分かっていない。「十字架」が何であるのか分かっていないのではないかとパウロは言う。

パウロは 14 節で「わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。」と言うが、その「誇り」というのは、自分がもともと持っていた誇りではなく、むしろそれが粉碎して、神様ご自身が与えてくれた誇りなのだという。それはまた、十字架において、「自分」が裁かれた＝死んだということを意味している。

シュラッターという神学者は、ガラテヤ書の注解の中でこのようなことを書いている。

「パウロにとっては、世はもはや輝きも偉大さも持たない。なぜならイエスの十字架によって、世の罪性と邪悪さは覆われ、神の裁きが世に現われたからである。…パウロは、割礼があるとなかろうと、彼らすべてを罪に定めた。彼らには死以外に、何があると言うのであろうか。」

人間は、神の独り子を殺したのです。聖書はそのことを明らかにしている。聖書は人間に対しては、キツパリと裁きを宣言なさる方。しかし人間が思っても見なかったことを神様はして下さった。あの十字架は私たち自身の死なのだという事！あのゴルゴタの丘の十字架の裁きは、私たちに「代わって」神の御子が受けて下さった裁きと死であったということ！

シュラッターは、このようなことを続けて言っている。「…彼らには死以外に、何があると言うのであろうか。しかし、彼らすべての者が十字架で啓示されている恵みによって、求めら

れており、また、世の罪を数えず、かえって、世と神との和解と自由へと召す、ゆるしに包まれているのを、パウロは見ている。パウロは世に対し、和解を提供する。こうして世は、パウロの奉仕を通して、ただ神の御前に存続するものを、受け取るのである。

神様が、罪びとである人間と和解をして下さる。驚きではないでしょうか。「神様」と「人間」の和解です。圧倒的に神様の言い分は正しいのです。人間が神を捨てたのです。申し開きは出来ません。けれども、神様の側の方から、和解を成し遂げて下さったと言う。神様はメンツを考慮しておられない。メンツを考慮していたら、イエス様を「十字架」にかけてしまうなどということをお神様はなさらなかったでしょう。これは、神様の、有無を言わせぬ、私たち罪びとに対する「愛」そのものだと思う。

そして、パウロは、この十字架のイエスが、私たちにもたらすものについて、15 節でこのように言う。「割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです。」…「新しい創造」！ 「創世記」で神様が「無」から人間をお造りになられました。しかし、その人間は、神様の前に「あなたはどこにいるのか」（創世記 3:9）と捜される存在、失われた存在になってしまいましたよね。…そして、今、神様はその人間を、新しく創造する、造り変える、と言うのです！。——「割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです。」

3. 神様による「新創造」

先週火曜日に川崎市で起きたとても惨たらしい事件。私は評論家のようにこの事件のことを言うつもりはありませんが、きっと皆さんもそうだったと思いますが、驚きを覚え、また深い悲しみを思わざるを得ませんでした。特に亡くなった人、傷を負った人のために祈りたいと思います。また、そのご家族はたまらないと思います。犯人（容疑者）は 51 才の男だったといいます。私と同世代です。今後報道はこの人の生い立ちのようなものをワイドショー仕立てにして色々なコメンテーターが語るのでしょうかけれども、私はあまりそういうのを見たくない。既にこの男はモンスター（化け物）であるかのような物言いを沢山聞きました。そのようにイメージを固定化するほうが楽でしょう。そして「死にたければ一人で死ねばよい」と言う言葉も SNS では飛びかっていたとのこと。けれども、この時代に彼のような男がいるということは、彼一人だけの問題で済ませられないのではないかと思います。或いは育て方、教育が悪かったということなのでしょう。もっと根深いと思います。彼の親族は、既に 14 回にわたって川崎市健康福祉局精神保健センターに相談していたということです。常軌を逸した事件ですが、彼の心の中に起こっていた葛藤やもがきや、孤独や絶望感も言うべきものと、私たちは全く無関係なののでしょうか？ —私自身は、そうは思えないのです。きっとそんなに遠い人間ではない。

私は思います。人は、深いところで、私自身が受け容れられている、「肯定」されているという体験を持つ、ということがとても大切なのではないでしょうか。私たちの心は、自分で自分を肯定し、すべて自分の力で自分の人生を走りぬいて行けるほど強くはない。増してや、お前はダメだとか負け組みだとかもっと強くなれなどという言葉ばかり聞いていたら、私たちは

どうなってしまうことかと思う。

私（私たち）に対する深い肯定の言葉は、「十字架」からやってきます！ここに、あなたに対する変わらない「愛」があることを聖書は告げています。神様の許から離れてしまい空しく彷徨う私たちを、神様が、神様の力によって、聖霊によって「新創造」して下さる、人間を新しく造り変えて下さる「愛」があるのです。割礼の有無は問題ではなく、とあります。そういう“外の表れ”ではなく、「誰か」や「何か」と比較の中に生きるのではなく、あなた自身の「新創造」が起こるのです！だからパウロはこのあとで、「原理」という言葉を用いています。

4. 「原理」(「基準」)ということ

「このような原理に従って生きていく人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように」(6:16)。この「原理」と言う言葉、何か血が通っていない言葉に思えてしまうかも。けれどもこれは素晴らしい表現だと思う。前の訳では「法則」、新しい訳や新改訳では「基準」となっています。もっと分かりやすい表現をするなら「ものさし」と言っても良いと思う。神様のものさし、神様の基準です。それが「十字架」なのです。人間が思いもしなかったことを神様は成し遂げて下さいました。神様がプランし、成し遂げて下さった故に、これは「変わらない原理・基準」なのです。参議院選挙の後、「憲法」の改正是非かという論議が高まるのではないかとされていますが、パウロが言う「この基準」は、これからもずっと、イエス様が救いを完成されるためにもう一度やって来られるまで、揺るがないのです。誰も変えることが出来ないのです。だからパウロは大きな字でこれを書きました。「これが目に入らぬか！」と言わんばかりに、それは有無を言わせぬ神様の「愛」なのです。

その原理、また、法則というものを、パウロはあのローマの信徒への手紙 8 章でもこう語っていました。8 章冒頭のところをお読みします。——「**従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。**」

私たちを滅びへと導く「罪と死の法則」が、今や、イエス・キリストによる「命をもたらす霊（聖霊）の法則」に、取って代られている、ということです。そして、今私たち一人ひとりはその法則によって生かされているのです。何と有り難いことでしょうか！

十字架。それは、私たちの罪や弱さにも拘わらず、神様の、人間に対する「お前の命を私は貴く思う」という肯定がハッキリと示された場所です。私たちは、ここで、自分自身の命の価値を新しく刻むのです。

結. イエス・キリストの「焼き印」が押されている

「ガラテヤの信徒への手紙」を終えるにあたり、パウロは、かつてクリスチャンと教会の迫害者であった自分を振り返り、そのような自分が赦され、かつこのイエス・キリストを宣べ伝

えているこの不思議な現実をきっと思いながら、「わたしは、イエスの焼き印を身に受けているのです。」(6:17)と書いたのではないのでしょうか。そしてそれは私たちも同じです。今、ここで礼拝を捧げている現実、これは当たり前のことではない筈です。神様の恵みを振り返ってみましょう。そしてその同じ神様は、今日も明日も、私たち一人ひとりをその御手を持って伴い、導いて下さいます。私たちの心には、「あなたはわたしの愛する子だ」という、イエス・キリストの焼き印が押されているのですから！

お祈り致します。